

『万葉集』 卷二冒頭「磐姫皇后」歌における「山 尋ね」表現の成因—中国情詩との関連—

The Origin of the Expression "Yama Tazune" in the Poem
"Empress Iwanohime" of the Manyoshu Vol. 2
- Relation to Ancient Chinese Love Poems -

吉村 誠 *

YOSHIMURA Makoto

摘要

『万葉集』巻2冒頭の磐の姫皇后の歌に「山尋ね」という表現がある。しかし「山そのものを尋ねる」と解釈すると、何故山を尋ねるのが理解出来ない。そこで多くの論は「山を通過して行く」と解釈している。一方、中国詩には、留守を守る妻が出征した夫を偲ぶ情詩のなかに「兵士として万里の長城に行く」という内容が多く出てくる。万里の長城は中原の平野部から見ると北の山間部になり、まさに「山を尋ねる」という内容になっている。そのことから磐の姫皇后歌の「山尋ね」の表現は、これらの中国詩の内容に由来していることが知られる。

Abstract

There is an Expression "Yama Tazune" in the Poem "Empress Iwanohime" of the Manyoshu Vol. 2. If "Yama Tazune" is simply interpreted as "searching the mountain itself", it cannot be understood why to search the mountain. Therefore many arguments are interpreted as "going through the mountain". In Chinese poetry, there are a lot of contents saying "Go as a soldier to the Great Wall" relating to a husband who went away. The Great Wall, as seen from the plains area of the Central Plains, is a mountainous area in the north, which is just like the image of "Yama Tazune". From this fact, it is known that "Yama Tazune" is derived from the contents of these Chinese poems.

1.はじめに

『万葉集』巻二巻頭に「磐姫皇后歌」と題詞にある四首の歌がある。この歌は「相聞」の冒頭にも位置し、相聞歌の代表として巻頭に置かれたと見

られている。一首目は左注にも見られるとおり、允恭記にも異伝歌が載せられており、伝承されてきた歌である。

しかし短歌体であり、成立はそれほど古くないとみられる。成立時期

* 山口大学教育学部教授

は特定出来ないが、万葉集収載歌は、『類聚歌林』収載ともあるので、舒明朝よりはさかのぼらないと考えられる。

作者は従来指摘されている通り、仮託されたものである。磐姫皇后は仁徳記や紀には嫉妬深い女性として描かれているが、逆に愛情深い皇后という概念がこの当時あったことを物語る。背後には葛城氏の勢力の盛衰を示しているとも読み取れるが、人物像としては愛情にからむ概念で語られていたと思われる。

また冒頭に置かれた理由として、直木孝次郎氏の指摘のように、光明立后との関わりから磐姫皇后が皇族でない皇后の前例として藤原氏によって強調されたということも考えられる。直木氏の論の当否はともかくとして冒頭四首は編纂された結果の歌群であるとみなければならず、万葉集講義が指摘するように起承転結構造の中で示されたものであることは誤りがないであろう。

こうした成立事情はともかく、本稿で取り上げたいことは歌の内容である。一首目の歌が中国の漢詩文における情詩と関わることについてはすでに中西進氏によって論じられている。しかし歌句の「君が行き」と「山尋ね」が具体的に何を指すのかは、曖昧なままである。そこで本稿では、情詩との関係において、これらの歌句の意味について、情詩の流れを追う事によって「山尋ね」となった表現の成因を論じてみたい。

2. 「磐姫皇后」歌

まず磐姫皇后歌群を掲げる。

相聞

難波高津宮御宇天皇代 大鷦鷯天皇 諡曰仁徳天皇

磐姫皇后思天皇御作歌四首

君が行き日長くなりぬ山尋ね迎へ
か行かむ待ちにか待たむ (巻 2・85)

右一首歌山上憶良臣類聚歌林載焉

かくばかり恋ひつつあらずは高山
の磐根しまきて死なましものを (同・86)

ありつつも君をば待たむうち靡く
我が黒髪に霜の置くまでに (同・87)

秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いつ
への方に我が恋やまむ (同・88)

或本歌曰

居明かして君をば待たむぬばたまの
我が黒髪に霜は降るとも (2/89)

古事記曰、軽太子奸軽太郎女。故
其太子流於伊豫湯也。此時衣通王、
不堪戀慕而追往

時歌曰

君が行き日長くなりぬ山たづの迎
へを行かむ待つには待たじ此云山多豆
者是今造木者也 (同・90)

右一首歌古事記与類聚歌林所説不
同歌主亦異焉。因檢日本紀曰難波高

津宮御宇大鷦鷯天皇廿二年春正月天皇語皇后納八田皇女將為妃。時皇后不聽。爰天皇歌以乞於皇后云々。卅年秋九月乙卯朔乙丑皇后遊行紀伊國到熊野岬 取其處之御綱葉而還。於是天皇伺皇后不在而娶八田皇女納於宮中時皇后 到難波濟 聞天皇合八田皇女大恨之云々。

亦曰 遠飛鳥宮御宇雄朝孀稚子宿祢天皇廿三年春三月甲午朔庚子、木梨輕皇子為太子 容姿佳麗見者自感同母妹輕太娘皇女亦艷妙也云々。遂竊通乃悒懷少息。廿四年夏六月御羹汁凝以作冰。天皇異之卜其所由。卜者曰 有内乱 盖親々相奸乎云々・

仍移太娘皇女於伊豫者、今案二代二時不見此歌也

左注が言うように、磐姫歌については記紀の伝承や異伝歌がある。この間の事情と解釈については寺川眞知男氏に詳しい論があるのでそちらに譲るとして（「磐姫皇后の相聞歌」『万葉の歌人と作品』1999.5 和泉書院）、ここで問題になるのは、一首目と三首目の異伝とその内容である。特に一首目の「山尋ね」は「山たづの」の異伝を持つが、「山を尋ねる」では「山を探し求めて行く」という意味になり、「君」の「行き」先に疑問が出てくる。

従来「山尋ね」の解釈として、誤字説が言われてきた。古注を含めて稲岡耕二氏に詳しい解説があるが（「磐姫皇后歌群の新しさ」『東京大学教養学部人文科学科紀要』60 1975.3）、再論すると異伝歌では「山たづの」とあ

るので、原文「祢」は「乃」の誤字であるとする。異伝歌が先に成立していたことを前提として、書写の早い時期に誤字が生じたとする。しかし誤字説は後世の合理的解釈として否定しなければならない。

一方で誤字説をとらない諸注釈書は、単純に「山を尋ねて」や「山に尋ね入って」という解釈のみである。

『万葉集釋注（伊藤博）』では「山を踏み分けて」と訳し、同様に『全注（稲岡耕二）』は「山中深く尋ね入っての意。」とする。同様に他の語注は「山中深く尋ね入って」という訳をしているが、それ以上の解釈と内容に対する言及はない。

また『万葉集古義』が「行幸し山路をた豆ねてなり」として、「御歌の意は、天皇の行幸しは、日く月日久しくなりぬ。今はかの山路を尋ねて、迎へに行くべきか、又は帰りまさむを直待つに待居るべきか、いかさま待居るには得堪まじければ、いでむかへにこそ行めの御意なるべし、但し磐姫皇后のよにいまししほど、天皇の他所に行幸しこと見えず、君が行きながくなりぬ、と宣はんことおぼつかなし。この一首は下に引ける古事記歌を誤り伝えたるべし。」とかなり古事記所伝と比較して踏み込んだ意味内容の解釈をしている。最近でも、川上富吉氏が仁徳記の黒姫伝承の嫉妬譚と比較して山越えを論じられたり（「磐姫皇后伝承像について—記紀と万葉における相違—」『大妻国文』1号 1970.3）、寺川眞知男氏が難波への行幸という実際的な仁徳天皇の

行動に比定して山越えの意味であると解釈されている（前掲書）。従ってこの表現から「山路を通って」という意味が含まれるとも理解されるが、「山」そのものに分け入る」というとらえ方の中で、「君」が行ったのは山そのものであるという解釈がこの表現を素直に読んだ時の意味になろう。

「尋ねる」は万葉集中他に六例あり、いずれも「尋ねる」は、対象そのものに行くことを示している。

年のはに鮎し走らば辟田川鶉八つ
潜けて川瀬尋ねむ（巻19・4158）

叔羅川瀬を尋ねつつ我が背子は鶉
川立たさね心なぐさに（同・4190）

うつせみは数なき身なり山川のさ
やけき見つつ道を尋ねな（巻20・4468）

〇〇を「尋ねる」という構文を中心に用例を掲げた。いずれも対象の土地を尋ねることを示しており、〇〇を「通って」という意味にはならない。しかし「山尋ね」を山そのものを訪れるでは意味がわからなくなるために、山の向こうに行くという意味に解釈されたものと思われる。

山そのものを尋ねるという意味の理解の上で、折口信夫は「魂ごひ」が元来の歌の意味であるとした。氏は二首目の歌が、死者への魂乞いとして「生」の側からよりも「死」の側にまわって行く気持ちの表明であるとして、「魂ごひしているよりも、せられている人の状態になった方がよい」と説く。そして「山尋ね」は、「山たづねの方式で迎えにいかねばなら

ぬか。」ととらえる。万葉集の他例から死者は高山に赴くとして、「やまたづの」の方が「この葉の向かひあふと謂った形の発想法を連想させるのである」として、今日から見れば合理的に説明出来るが、当時の習俗から見ると「やまたづね」の方が自然であるとする。従って折口説によると「やまたづね」から「やまたづの」と変化したとみている。「やまたづね」の方式とは、仮死状態とみられる死者を前にしての魂こひの習俗であって、山中に行った魂を乞い求めに行くという意味に解している。（折口全集8「恋および恋歌」1955.10初 中央公論社）。

折口説は魅力的な論であるが、この歌の成立時点でのとらえ方であると見なければならず、この歌群が後の成立であったとすると、歌群の構成者は魂乞いの挽歌であるとしておらず、相聞歌としての解釈がなされていたとみななければならない。また稲岡耕二氏も、「待つてはいられない」という折口の解釈に「文法を無視したかなり強引な解釈」とであると反論されている（前掲論文）。

ここで注目されるのが、『古事記』所伝の歌の「山たづの」に注があることである。『古事記』には「読歌」としてしているので、宮廷歌謡として伝わっていたことが知られるが、『古事記』編纂時点では「山たづ」が意味不明になっていたことを物語る。とするならば、磐姫皇后歌にされてきたときに、理解出来なくなって「山尋ね」に再解釈され「の」が「ね」に

改編された可能性はある。もちろん背景には『古事記』所伝歌が母体であり、磐姫歌がそこから派生したとみななければならないが、ここは緒論一致した見方である。とすると「山尋ね」は伝承の過程の誤伝ではなく、この歌群の構成者が意識的に改変を加えたとみななければならない。

このように見てくると、「山尋ね」は「山を尋ね入って」という理解内容で解釈されたことを物語っている。とすると「山に分け入る」という理解の根拠があるはずである。そこに中国文学における「山に行く」とらえ方が介在しているように思える。そこで次に中国文学における「山に行く」漢詩文の存在を確認してみる。

3. 中国文学における「山に行く」

磐姫皇后の歌群と情詩との関わりは中西進氏によって既に指摘されている。中西氏は、この歌全体を主に六朝詩に描かれている情詩の影響があると指摘された。その目で見ると、磐姫皇后歌は、「君の出遊が日数長く立っていること」とそのことに対して強い恋情を抱いている内容となっていることから情詩と同様であることは首肯される。

一方、六朝時代の情詩の流れをとらえると一つの詩の流れが浮かび上がってくる。その発端となるのが『玉台新詠』「雑詩九首 其五 青青河畔草」である。この詩は『文選』にも古詩十九首中の第二に取られている。

青青河畔草、鬱鬱園中柳、盈盈樓上女、皎皎當窗牖、娥娥紅粉妝、纖纖出素手、昔為倡家女、今為蕩子婦、蕩子行不歸、空床難獨守

この詩は、元の娼婦が浮気者との不幸な結婚のために一人さびしく留守居をする姿を描いた内容であり、怨恨詩とも言えるもので、棄捐婦の系統にも属するものである。詩は第三者の視点として楼上の女を描き、行ったまま帰らない浮気男を空閨で待つ耐え難い思いを綴っている。

典型的な情詩であるが、この詩には擬古詩が多くあり、一連の流れが見られる。

具体的には、晋武帝の時代の傅玄（217-278）の

樂府七首 青青河邊草篇
青青河邊草、悠悠萬里道、草生在春時、遠道還有期、春至草不生、期盡歎無聲、感物懷思心、夢想發中情、夢君如鴛鴦、比翼雲間翔、既覺寂無見、曠如參與商、夢君結同心、比翼遊北林、既覺寂無見、曠如商與參、河洛自用固、不如中岳安、回流不及反、浮雲往自還、悲風動思心、悠悠誰知者、懸景無停居、忽如馳駟馬、傾耳懷音響、轉目淚雙墮、生存無會期、要君黃泉下

遠くへ去った夫を偲ぶ妻の恋情を歌った内容で、どこへ旅だったかは

明確に記されていないが、ひたすら待つ恋情を表したものである。『新釈漢文大系(明治書院)内田泉之介』は、後述の「飲馬長城窟行」(蔡邕)に擬した作としている。

また晋の陸機(261-303)の「擬古七首(其五 擬青青河畔草)」は、

靡靡江蘼草、熠熠生河側、皎皎彼姝女、阿那當軒織、粲粲妖容姿、灼灼美顏色、良人遊不歸、偏棲獨隻翼、空房來悲風、中夜起歎息

とあり、第三者の立場で遠くへ出かけた夫のことを偲ぶ情を歌っている。

これらの詩は、夫がどこへ何のために遠行しているかは明示されていないが、次の鮑令暉(464前後)の「雜詩六首 其一 擬青青河畔草」は、従軍している夫に対して思婦の思いを述べたものである。

裊裊臨窗竹、藹藹垂門桐、灼灼青軒女、泠泠高臺中、明志逸秋霜、玉顏豔春紅、人生誰不別、恨君早從戎、鳴弦慙夜月、紺黛羞春風

ここでは遠行の理由が出征であると明確に出てくる。

以下、同題の擬古詩はまだ三首ある。

「擬青青河邊草」沈約(441-512)

は、南北朝時代の宋、齊、梁の人。

漠漠牀上塵、中心憶故人、故人不可憶、中夜長歎息、歎息想容儀、不欲長別離、別離稍已久、空牀寄杯酒

この詩は、離別した妻の慕情を描いたものであるが、やはり遠行の理由は明らかにされていない。

何遜(?-517)の「學青青河邊草」も思婦が遠行の夫を思う情緒を示したものであるが、注意されるのは、蔡邕(133-192)の「飲馬長城窟行」にも学んだとされることである。

取飢蠶食、夜縫千里衣、復聞南陌上、日暮采蓮歸、青落覆寒井、紅藥間青薇、人生樂自極、良時徒見違、何由及新燕、雙雙還共飛

蔡邕の「飲馬長城窟行」とは以下の詩である。

青青河邊草、綿綿思遠道、遠道不可思、宿昔夢見之、夢見在我旁、忽覺在他鄉、他鄉各異縣、展轉不相見、枯桑知天風、海水知天寒、入門各自媚、誰肯相為言、客從遠方來、遺我雙鯉魚、呼兒烹鯉魚、中有尺素書、長跪讀素書、書中竟何如、上言加飧食、下言長相憶

『玉台新詠』では作者は蔡邕となっているが、『文選』は作者名は記されていない。先の詩と同じく、遠行の夫を思う夫人の情を述べたものであるが、詩題が「飲馬長城窟行」となっている。夫は万里の長城へ行っていると想像させるものである。内容と詩題が合わないが、同じ詩題は陳琳(?-217)の「飲馬長城窟行」がある。蔡邕の詩に触発されて詩題の構図で作られたと考えられる。

陳琳の詩は以下のようなものである。

飲馬長城窟、水寒傷馬骨、往謂長城吏、慎莫稽留太原卒、官作自有程、舉築諧汝聲、男兒窟當格鬪死、何能怫鬱築長城、長城何連連、連連三千里、邊城多健少、內舍多寡婦、作書與內舍、便嫁莫留住、善事新姑章、時時念我故夫子、報書往邊地、君今出語一何鄙、身在禍難中、何為稽留他家子、生男慎勿舉、生女哺用脯、君獨不見長城下、死人骸骨相撐拄、結髮行事君、慊慊心意關、明知邊地苦、賤妾何能久自全

この詩は詩題の通り、征夫と思婦の書信によって長城築造の苦難を叙したものであり、舞台は万里の長城である。

ここで注意しておかなければならないことは、元来「河畔」とあったの

が「河邊」と入り交じっていることである。先に掲げた蔡邕の詩は、「岩波文庫『玉台新詠』鈴木虎雄訳解」には「河邊」とし、『文選』五臣注本は「邊」を「畔」に作る。紀氏の説によると、六朝の擬作は「青青河邊草」と題する者は蔡邕作と稱する此篇に擬したものであり、「青青河畔草」と題する者は本書に枚乗作と稱する雜詩中の作に擬したものであるから「邊」はよく「畔」はよくないということである。」とある。文中「紀氏」とは清の紀容除の「考異」を指す。『新釈漢文大系(明治書院)内田泉之助』も紀容除の「考異」に従っているので、「河邊」とする。

またこれと呼応していると言われているものに、梁武帝の「擬青青河邊草」がある。

幕幕繡戶絲、悠悠懷昔期、昔期久不歸、鄉國曠音徽、音徽空結遲、半寢覺如至、既寢了無形、與君隔平生、月以雲掩光、葉似霜摧老、當途競自容、莫肯為妾道

遠行の夫を思う妻の情が述べられているもので、『新釈漢文大系』(内田泉之助 明治書院 1975.5)は、蔡邕の「飲馬長城窟行」と呼応していると解説する。

また荀昶(420頃)の「樂府二首 其二 擬青青河邊草」も思婦の征夫への恋情を述べたものである。

熒熒山上火、苕苕隔隴左、隴
左不可至、精爽通寤寐、寤寐衾
幃同、忽覺在他邦、他邦各異邑、
相逐不相及、迷墟在望煙、木落
知冰堅、升朝各自進、誰肯相攀
牽、客從北方來、遺我端弋綈、
命僕開弋綈、中有隱起珪、長跪
讀隱珪、辭苦聲亦悽、上言各努
力、下言長相懷

場所は「隴左」とあり、現在の甘肅省のこと。

中国北西部に位置し、夫は長城での辺境防衛も

当たっていると見られる。

このように見てくると、これら一連の擬古詩は、古詩七首（『文選』十九首）の詩の主題とは異なり、夫の遠行は、従軍して辺境の地に行くことが背景にあることが知られる。先述の内田泉之介や鈴木虎雄の言う二通りの擬古の流れがあると見てよいであろう。

しかしその源流になったと見られるのが『詩経』の詩であろう。

国風 卷耳

采采卷耳、不盈頃筐、嗟我懷
人、寘彼周行。
陟彼崔嵬、我馬虺隤、我姑酌彼
金罍、維以不永懷。陟彼高岡、
我馬玄黃、我姑酌彼兕觥、維以
不永傷。陟彼砠矣、我馬瘠矣、
我僕痛矣、云何吁矣。

この詩は、卷耳（ハコベの類）を採る婦人の思いを歌ったものである。一段落目は野草を採るが遠行の夫を思うあまり、籠一杯にはならないことを言う。そして二段落以降はその夫を主体として歌ったものである。二段落目以降の「我」は夫を指し主体が代わる。その夫は岩石の険しい山道（崔嵬）を登っている。そして疲れた馬を駐めて酒を飲み、憂いを忘れるというのである。毛詩や鄭箋の解釈は周室との関わりで解釈し、后妃の行動ととらえているが、全体的には遠行の夫を思う夫人の情を述べたものである。「青青河畔草」は浮気男に対する夫人の怨嗟が主題となっていて、卷耳の夫婦別離の恋情とはかなり趣が相違するが、後の擬古詩と同じ構図であり、夫人が遠行の夫を思うという状況設定の点では同類であると考えられる。そしてこの「卷耳」は、陳琳の「飲馬長城窟行」にも影響を与えたと思われる。先にも見たように、陳琳の「飲馬長城窟行」は長城工事の苦難を述べたもので、征夫と思婦の書信によって長城築造の苦を叙したものである。この夫婦の交情を両者の立場から詠んだという点では「卷耳」と同じ構成になっている。

また、『詩経』には他に、

召南・殷其雷

殷其雷、在南山之陽、何斯違斯、
莫敢或違、振振君子、歸哉歸哉。
殷其雷、在南山之側、何斯違斯、
莫敢違息、振振君子、歸哉歸哉。

殷其雷、在南山之下、何斯違斯、
莫或違處、振振君子、歸哉歸哉。

國風・衛・伯兮

伯兮朅兮、邦之桀兮。伯也執殳、
爲王前驅。

自伯之東、首如飛蓬。豈無膏沐、
誰適爲容。

其雨其雨、杲杲出日。願言思伯、
甘心首疾。

などのように、遠行している夫への
恋情を述べる詩がある。

前者は、公役について遠行している
夫の帰りを待つ妻の感情を述べた
ものであり、「遠く公役につく」とい
う語はないが、「莫敢或違」という句
の読み取りで諸注は一致していて、
内容的には後世の「情詩」に通じる構
図となっている。毛詩序は、「殷其雷
は勸むるに義を以てするなり。召南
の大夫、遠く行きて政に従ひ、寧処
するに違あらず。其室家能く其の勤
労を閔み、勸むるに義を以てする
なり。」と解釈し、今で言う単身赴
任の夫の勤務多忙をねぎらっている
という意味に理解している。感情的
恋慕というよりも、夫の忠勤ぶりを
婦の義で労っているということであ
るが、これが当時の情詩の基本的解
釈であろう。そこから夫を慕う情が
出ているという通念であったととら
えられる。

ここから見ると、情詩は棄捐婦につ
ながる怨恨的感情と、夫の遠行を労
い、恋情を発する内容の二種類に発
展していったととらえられる。従っ

て後者の遠行は、役務として従事し
て自由のないことと険峻な山地であ
るほど、婦人の恋情が深いという同
情の念が詩の享受者には起こること
になる。

また後者は、詩序に「伯兮は、時を
刺るなり。君子行役し、王の為に前
驅し、時を過ぎて反らざるを言ふ。」
とあり、遠征への批判的な思いを綴
った詩であると解するが、大半は集
伝のように「夫人、夫の久しく征役
に従ふを以てして、この詩を作る。」
と解している。出征先は東とあるので、
歴史的な考証をする注もあるが、こ
こでは出征して長く帰らない夫を慕
う婦人の情を描いたものが主題であ
るとして解しておきたい。

このように見て来ると、『詩経』に
おいては、春秋戦国時代における夫
の出征を基本として後に残された婦
人の情を描くというのがその背景に
ある。そして出征が長く苦難の地
であるほど、人々の同情を買うこと
になる。

このような『詩経』の描き方を源流
として、「情詩」の流れがあると理解
してよいであろう。とすると漢代に
降った古詩十九首の「青青河畔草」
の浮気男を怨む婦人の情はあたらし
く派生したものと見てよく、結局そ
の後の擬古詩は、遠行の夫を慕う純
粋な婦人の恋情を描く方向に戻って
おり、しかも遠行先が陳琳の「飲馬
長城窟行」のように辺境での労役に
ついてるとするほど人々の同情を買
うことになる。主に情詩が読まれる中

原の地から見ると、長城は北の山岳地帯になる。ここに遠行先が「山」という概念になっていったと思われる。

このように『玉台新詠』の情詩（一部『文選』に重複）とその擬古詩をめぐってとらえてみると『詩経』にまで遡る一連の流れが存在することが知られる。そして夫の遠行先が辺境の山地で期間が長ければ長いほど、婦人の情の強さが見る者に同情的に共感されるという傾向を追っていることが知られる。

磐姫皇后歌がこのような情詩の情緒を汲んで理解されたとすると、君の遠行は日数長くなり、しかもそれが険しい山であるという状況であるほど、作者の葛藤が強調されて伝えられるであろう。それが「山尋ね」の句に変えられていった理由であるのとらえるのも自然である。

ただしこれはまだ磐姫皇后に仮託され、磐姫物語というべき四首構成にされる前の理解方法であると考えなければならない。情詩との関係は、磐姫と仁徳という具体的な人物像と物語概念とは切り離してとらえなければならないからである。

またこの山の情緒は二首目の「高山の岩根」につながっている。辰巳正明氏は、二首目の歌については、肥前国風土記逸文の杵島振りの歌垣歌やその流伝と見られる『古事記』隼別王歌謡の舞台が山であるのとらえて、情死が山であることを踏まえて、こ

の二首目の歌も山での情死が本来の主題であったと見られている（辰巳正明「風流鬼論—磐姫皇后と原撰部相聞歌の形成—」『京都語文』15号2008.11）。歌そのものの持つ意味としてとらえるとそうした論も肯えるが、この歌群の編纂者の視点に立つと、山の継続性によって一首目とのつながりの中で同類の歌を選択したと思われる。

4. まとめ

以上のように考えてくると、磐姫皇后歌群の一首目の「山尋ね」は、「山を通過して」という意味ではなく、「山に分け入って」という意味で解釈しなければならず、それは具体的な物語が成立する以前の中国の詩経から続く情詩の流れの中で、夫の遠行先が「山」と概念化され、歌表現になったととらえることが出来る。

『詩経』『玉台新詠』の本文は、「維基文庫」に拠るが、論説によって意改している箇所もある。

本稿は台湾淡江大学におけるシンポジウム予稿集（淡江大學文學院「東亞文明主體性」國際學術檢討會議「會議論文」2018.11.1）を加筆訂正したものである。

席上、「與談人」内田康淡江大学日文系副教授に貴重なご意見をいただいた。記して深謝する次第である。